

## 先週の説教要旨

『下る道へ行け』井上隆晶牧師  
使徒 8:1~5、26~31、ルカ 9:23~26

①【散ることによって】ステファノの殉教をきっかけとしてエルサレム教会に対する大迫害が起こり、使徒たち以外はことごとくユダヤとサマリアに散っていきました。どうして使徒たちはエルサレムに残ったのでしょうか。生まれたばかりのエルサレム教会を守るためだったのかもしれませんが。しかし使徒言行録6章~8章を見ると、使徒たちよりも散っていった人たちのほうが、めざましい働きをしているのがわかります。こう書かれています。「さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。」この「散る」ということを私たちはとても嫌います。散ることは弱くなることだからです。聖書の中に最初に「散る」という言葉が出てくるのはバベルの塔の物語です。天まで届く塔を建てた人々は「全地に散らされることのないようにしよう」（創世記 11:4）と言いましたが、主なる神は彼らをそこから全地に散らされました。（創世記 11:7）歴史の中で神は、イスラエルの民を何度も散らしました。エジプトやバビロンの奴隷であった彼らは、そこから解放されて祖国に戻ってきて国を再建するのですが、再びローマによって国を滅ぼされ、全世界に散ってゆきます。世界中に散った彼らは、自分たちユダヤ民族のアイデンティティーを失わないために、先祖たちの物語を書き、神の預言を集めて編集し、旧約聖書を作ったのです。そうやってユダヤ教はできたのです。教会も同じです。迫害されて世界に散らされることによって教会は成長したのです。

②【得ることよりも失うことを】一人の宣教師がイヌイット（エスキモー）に伝道しました。その年は飢饉になりました。イヌイットたちはキリスト教の宣教師が自分たちの神とは異なる神を持ち込んだので、現地の神が怒って飢饉を起こしたのだと考えました。そこで宣教師のところへ行き、「お前の神に祈ってクジラを自分たちに与えてみよ。もし、クジラを与えられなかったら神の怒りを鎮めるためにお前を崖から落として殺す」と言いました。宣教師は昼も夜も熱心に祈りましたが、クジラは一匹も捕れませんでした。イヌイットたちは怒って宣教師を崖から落として殺しました。次の日、宣教師の死骸を捜しに浜辺に降りてみると、その死骸の横に一匹の大きなクジラが横たわっていました。彼らはそれを見て悔い改め、キリスト教信者になったそうです。キリスト教信仰というのはそんなに簡単に人に伝わるものではありません。説明したら分かってもらえるようなものでもありません。信仰というのは体を張って、自分の命を懸けて伝えなければ伝わらないものです。殉教は悲しく、怖いことですが、不思議なように信仰の子を産んでゆくのです。ステファノの殉教を見たパウロはやがて大伝道者になります。そのパウロが今度はリストラで同じように迫害され、石を投げられて大怪我をしますが、それを見ていたテモテがまたクリスチャンになり献身してゆきます。こうして血が流されて、教会は動かないものとなっていきました。私たちは受けることよりも、与えることを考えなければなりません。与えても痛くもかゆくもない程度に与えるのは与えたことにはならないのです。与えることが、自分が痛いと感じなければ与えることにはならないのではないのです。受けることよりも捨てることを本気で考えなければなりません。それが十字架を負って後に従うということなのです。↑

# 週報

日本キリスト教団 都島教会

伝道所設立 1957年12月1日 教会設立 2001年12月2日  
〒534-0012 大阪市都島区御幸町 2-6-17

TEL06-6922-1120 FAX06-6922-1120

Eメールアドレス: [miyakoch@eagle.ocn.ne.jp](mailto:miyakoch@eagle.ocn.ne.jp)

ホームページアドレス: <https://miyako.jima-church1.com>

郵便振替 00920-4-1442 日本基督教団都島伝道所

主任牧師 井上隆晶

2025年7月6日 No.1827



《聖パウロの回心》

## 都島教会の2025年度の宣教方針

標語 《会堂建築の準備をしよう》

聖句 「主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしい。」（詩編 127:1）

### 2025年度の目標

- 1 毎週礼拝を守り、礼拝出席平均 28 名を目指します。
- 2 一年間に一人を礼拝にお誘いします。
- 3 信徒の交わりを大切にします。
- 4 会堂建築のための具体的な準備を進めます。